

おわりに

二〇〇〇年の歴史遊行の旅

*洛陽で得たふたつの自己目標

赤い兎の目と戦争の記憶

*灯火管制の下で・・・

おわりに

二〇〇〇年の歴史遊行の旅

洛陽（ルオヤン）。

いまでも現代都市として輝いている中国・中原の古都洛陽市には申し訳ないが、若年のころからわたしが関心を寄せつづけたのは、歴史の底に輝く文明揺籃の地であり、周公旦が「土中」と呼んだ洛邑であった。

そして何よりも二〇〇〇年ほど前の後漢時代に倭の奴国王の遣い（五七年）が、さらに三国時代の魏に女王卑弥呼の遣い（二三八、二四三年）がはるばると朝貢に訪れた都、「日中交流の原点」ともいうべき古都としての洛陽であった。

洛陽（洛邑）を訪れるという「二〇〇〇年遊行の旅」

それは若い日からの志として、心の奥のあちこちに移動させながら持ちこたえてきた。「初志」というよりは夢の領域に近かったから、実際に果たすとなると外から呼び覚ましてくれる何か特別の力が必要だった。そんな衝撃的な力が何度かやってきて、契機はこれといって明確ではなかったが、いくつかの力に合わせ押されるようにして、洛陽へと出奔した。

一九九四年の秋のこと。わが国が「高齢化社会」から「高齢社会」にはいったとされる年（高齢化率一四％）である。

定年を待たずに五五歳で、通い慣れた新聞社を自主退社して、遠い日の夢 であつた「二〇〇〇年遡行の旅」を果たすことになつたのである。

かつて日本からの遣使が、「何か」貴重なものを求めて、足跡を残した古都を訪れて、この国と大陸との関わりの原点に立つことで、大陸とこの国の将来を見はるかす糧を得るといふ漠とした目標を課しての出奔であつた。

そんな唐突な来訪者を温かく迎え入れてくれた洛陽市の洛陽外国語学院での外籍専家（客員教授）として長期滞在することとなつた。

九里×六里の城壁のほかは何も残らない「洛陽漢魏故城」。

夏はとうもろこし、冬は麦の畑中の道を歩きながら、倭国からの遣い人を思い、邪馬台国からの難升米や都市牛利（どう読むのか）を偲び、王城跡から漠として東方に思いを馳せたとき、「東京」は奈良や京都に対応する東都であるとともに、当然あつていい現代の「東アジアの大都市東京」として多重化して意識されたのであつた。

飛鳥と洛陽。

かつて若い日に、「くにのまほろば」の地である奈良や飛鳥の地（ヤマト）をたずねて畑中の道を歩きながら東方をみたとき、日本の歴史のながれと東京の役割が納得されたように、現代アジアでの日本のなすべき役割が発見できるような予感があつた。

*洛陽で得たふたつの自己目標。

五五歳で、そのころめずらしかった「早期自主退社」をしてまで、しかも欧米の都市ではなくなぜ洛陽に？

長く「平和」でありつづけた時代が「長寿」として与えてくれるその後の人生になすべき課題とかかわってはいしたが、三年の滞在を終えて「洛邑土中」の地から帰国したあとも、なぜ中原に？ と問われてなお漠とした答えしかなかった。「平和裏」にこの国で暮らす国民（市民）としてなすべき役割ということだけは確かだったが。

そして世紀末に還暦とともに一九九九年の「国際高齢者年」を迎えたことで、この国に綺羅星のように輝く高齢の人びとともになすべき事業、平和の証である「日本高齢社会」形成への参画がひとつ明らかにになった。それと同時にもうひとつ、平和裏での「アジア共生への貢献」（先行国日本の「アジア途上国化」とアジア途上諸国の「日本化」）も。

見出したふたつの課題に対して、一個の人間の力の小ささは自明のことであったが、「日本長寿社会（高齢社会）」の達成と「アジアの共生」（モノの豊かさの共有）というこのふたつの事業は、国際的にも注目され期待されるわが国の役割であり、「平和裏」になすべきその事業に力を尽くして参画するというのが、世紀を越えて一〇年余をへて、わたしの確とした信念となっている。

先達のご努力でどちらも具体的に明確になりつつあるが、どちらも後人の厚い支持をえて達

成される新時代の成果としての姿はまだみえてはいない。

上記ふたつの課題に関する著作を友人の支援をえて公刊することができたが、いずれも洛陽の紙価を高めるにはなお遠い。

赤い兎の目と戦争の記憶

灯火管制の下で。

昭和一三（一九三八）年の暮れ近くに東京の渋谷区で生まれた。

子どもの目に焼きついた戦争の鮮明な光景がある。

その夜、灯火管制でうす暗い家の中が急にざわめいて、大人たちみんなが二階に上がり、物干しや道路側の雨戸を細くあけて夜空を見上げた。わたしも雨戸の隙間からおそるおそる夜空を見上げた。何本かの探照灯に照らし出されたB29。迫っていく日本の戦闘機。高射砲弾の煙と音。子どもの目でそれぞれの距離感は測りようもなかったが、B29はゆうゆうと上空を横切っていた。

父と母の挫折。

それからまもなく、母と子どもたち（わたしと妹）は父方の実家がある群馬県の農村に疎開することになった。

父は農家の次男坊で、東京へ出て小さな工場を経営していた。母は勝気な江戸娘で、銀座の

デパートづとめをしていたころ、有名な女優さんが買い物をする場面に出演したことが自慢で、何度も繰り返し聞かされた。少年のわたしは両親の持ち味の違いに戸惑ったが、無口で実直な父のほうに味方した。

父の実家近くで借家暮らしをはじめてほどなく、東京大空襲で父の工場は焼失し職人たちは散っていった。東京での父の労苦は跡かたもなくなり、都会育ちの母は暮らしの基盤を失った。

疎開先での暮らし。

榛名おろしの空っ風、八幡さまの杜と杉の並木、信越線の細く長い線路、野外映画会を見た校庭、墨を塗った教科書、すぐ破れてしまった運動靴、春風と疾風のようなふたりの女先生、ドドメ（桑の実）、モモの摘果、ウメのひこばえ、道祖神の火、「鐘の鳴る丘」、草を食む兎、ぶつちめのスズメ、流し針のウナギ、田んぼのヒル・・・。

戦争を避けて父の実家がある農村で過ごした日々。わたしは本家のいとこたちや学校の仲間とすぐに馴染んで暮らすことができた。しかし自分には見えない都会少年のシッポを付けていたにちがいない。将来のためといって母が着せた“衣装”である。

小学校に入ったときが終戦の年で、終戦の日は学校に呼び出されて、校長や先生方からいろいろな話を聞かされて、わけがわからないままひたすら明るい気分になって家まで走ってかえった。

赤い兎の目の記憶。

ある日、家の壁に寄り添って小さな兎小屋ができた。妹が求めたものだったのだろうか、摘んできた草の束を扉を開いて放ると、奥から兎が跳んで出てくる。赤い目でじっとこちらを見つめてから草を食べた。そのようすをこちらもじっと見つめた。危険を察知する大きな耳と跳んで逃げる後ろ足。戦うべき機能をもたない兎。びくびく動く鼻とじっと見つめる赤い目が記憶に残った。

ある日、草の束をもって小屋にいくと、もうそこに兎はいなかった。死んだのか逃げたのか他の動物に襲われたのかはわからなかったが、そのまますぐに忘れた。にもかかわらず、その姿がその後いくどとなくよみがえる。

「ふるさと」の喪失。

小学五年生の一学期の途中で、わたしはみんなと別れて東京に戻るようになった。

母の意向だったのだろうが、将来の不安は胸のなかに渦巻いていた。

担任のK先生は親しかった何人かの仲間といっしょに信越線の踏切まで見送ってくれた。線路を渡ってひとりになったわたしは、振り返ることもなしに八幡さまの杜に向かって走った。背中に感じたK先生の視線と親しかった仲間との「別れの感覚」はいまも忘れられない「ふるさと」喪失の記憶である。

「雪中高土」のように。

その後借りていた家は朽ちたが、わたしが植えたウメのひこばえは老樹のたたずまいをして

立っていると聞いた。わたしもあれから60年余を大都会で過ごして、いま此処に立っている。願わくば親木がそうであったように、冬の野に「雪中高士」として立ち、幾輪かの香りのいい花をつけていてほしいものである。

上記はともに高連協（高齢社会NGO連携協議会）の同輩とともに編んだ二著からのものである。

二〇〇〇年の歴史遊行の旅

『頑張って生きよう！ ご同輩』（博文館新書・二〇一三・一一・二〇）より

赤い兔の目と戦争の記憶

『続・頑張って生きよう！ ご同輩』（博文館新書・二〇一四・四・八）より